

琵琶湖におけるカワウの食性に関する研究

川村 めぐみ 漁場学専攻

【目的】近年、琵琶湖におけるカワウの生息数が急激に増大してきている。カワウは、大型の水鳥（全長約 80cm、翼開長約 130cm、重さ約 2kg）で、主に河川や沿岸に生息し、潜水して魚を捕食している。そのため、琵琶湖においてもカワウによる漁業被害が懸念されている。しかし、実際カワウが何を食べているか、またカワウによる被害がどのようなものなのかは解明できていない。そこで、本研究ではカワウが琵琶湖地域において何を採餌しているかを胃内容物から調べた。

【方法】調査は、2001年4月から10月まで行なった。調査地は、琵琶湖北湖南東岸のカワウのコロニー（滋賀県近江八幡市伊崎半島）周辺、琵琶湖の南湖西岸の滋賀県大津市、琵琶湖の流入河川の1つである野洲川流域（滋賀県甲賀郡甲西町、水口町、甲賀町）である。琵琶湖では、4月から6月までは、カワウの駆除が行なわれている。そのため、この期間は少なくとも月に1回現地に行き回収された遺体を貰い受けた。8月以降は、伊崎周辺での学術調査捕獲の許可を得て、カワウの収集を行なった。収集したカワウは、琵琶湖博物館で解剖して胃を取り出し、70%アルコール溶液で固定した。そして、胃から内容物を取り出し、消化されていない形がきれいに残っている魚は、重量を量り、可能な限り魚種を判定して70%アルコール溶液に固定した。骨が残っていたものに関しては、咽頭歯と尾鰭の骨を別にして70%アルコール溶液で固定した。咽頭歯は、その形態により魚種を判定した。尾鰭の骨は、実体顕微鏡を用いて出来る限り魚種を判定した。その中でアユと判定された尾鰭は、高橋ら（印刷中）による体長の推定式によって体長を推定した。その後、三浦ら（1966年）による重量の推定式を用いてアユの重さを出した。この式から出た値と、形が残っていた魚の重さを各個体ごとに足すことで、1羽あたりの採餌量を出した。

【結果】カワウの餌魚種を月ごとに見ると、4月、5月に比べ、6月、8月、10月のカワウの方が、種類数が少なかった。魚種別に見ると、アユは、4月から8月にかけて個体数と重さの割合が増加していたが、10月の胃内容物には出現しなかった。8月は、産卵期のためアユが沿岸や河口に集まる。カワウがそれを捕食したと考えられる。ハスは、調査期間中常に確認されたが、一方、ゼゼラは4月だけに、イサザは5月だけに採餌が認められた。ブルーギルは4月、5月と10月に見られ、6月と8月には見られなかった。場所による違いを見ると、大津周辺で獲られたカワウは、ほとんどの個体がブルーギルを採餌していた。それに比べ、同時期の伊崎周辺のカワウは、様々な魚を採餌していた。また、野洲川流域で獲られたカワウは、主に河川に生息している魚を採餌していた（表1）。これらのことからカワウは、季節ごとに採餌する魚種が変化し、同じ時期でも場所によって餌魚種が異なることが明らかになった。

表1 カワウの採餌が確認された魚種

魚種	琵琶湖	河川
アユ		
オイカワ		
カワムツB型		
ウグイ		
カマツカ		
ゼゼラ		
ハス		
ホンモロコ		
スゴモロコ		
タモロコ		
ゲンゴロウブナ		
ギンブナ		
ムギツク		
コイ科魚種		
イサザ		
トウヨシノボリ		
オオクチバス		
ブルーギル		

